LightPDF

町民と一体になり創り上げる 標茶町インターネットプロジェクト（SIP）

佐藤吉彦
標茶町インターネットプロジェクト事務局長／
標茶町総務課行政開発係長

中学校での取り組みがそもそもの始まり

北海道の東に位置し、人口約1万人、面積1,099.56キロ平方メートル、町村で全国第3位で東京都の約半分の広さのまち標茶町（しべちゃ）で、SIP（標茶町インターネットプロジェクト）というプロバイダー業務が平成8年9月より始まった。稼働から約1年。小さなまちの、大きな志の活動を紹介する。

そもそも、まちにプロバイダーの話が始まったのは平成7年の夏ごろから。そのころ町内の阿歴内小中学校でインターネットを使った先駆的な取り組みが実践されていたが、アナログ1回線で電話にファックス、それから町内の教職員が運営するBBSに利用するという不満な状況だった。しかし、その取り組み等が評価されことと関係者の理解により、その後全中学校にISDN敷設を行うことになった。

こうなると、インターネットを授業に使いたいというもくろみも膨らみだした。当時、町内でインターネットを利用しようとすると、札幌や東京のプロバイダーに繋ぐしかなく、当然高額の通話料を覚悟しなければならない。それならいっそのこと町内にプロバイダーがあればと、夢物語が始まったのである。

行政内部でも、平成8年度から庁舎内LANの構築の計画があり、同時に町内の将来の地域情報化の推進を図りたいとの思惑から、インターネットの導入をきっかけとして情報化を推進することになった。

アンケート結果に勇気づけられ、業務開始

しかし、標茶町でインターネットの導入といっても、簡単に理解される状況ではなかった。そこで、町内の商工会や農協、学校関係の団体や情報化に興味を持っている個人に呼びかけ、プロバイダーの開局と同時にインターネットの町内導入を図りながら、地域情報化の検討を行っていく第3セクター的組織とし、SIPを平成8年8月に発足させた。

また、町内ではインターネットはまだまだ少数の人たちのモノであるという認識であったが、町民約2千世帯に実施したアンケート調査の結果、多くの町民が関心を持っていることが分かり、勇気づけられた。そこで、プロバイダーの町民向け低料金（個人5,000円、法人10,000円／年・固定制）での提供と同時に、全学校にインターネットを体験できるパソコンとデジタルカメラなど1セットを配置、また役場ロビー、図書館には無料の体験コーナーを設置し、多くの町民がインターネットを利用できる環境をつくった。

平成8年9月の開局前には、14日間に渡りインターネット体験講習会を実施し、日中は校長・教頭・教員、小中学生、夜は一般町民、また町議会議員の時間も設定するなど約200人が受講し、盛会に終わった。

このインターネット体験講習会の効果が現れたのか、ユーザー数は平成8年9月の第1次募集定員の100名が10日も待たないで締め切られ、11月の第2次募集も同じ状況で、現在約250名がインターネットを楽しんでいる。ユーザー向け回線数は、当初ISDN3回線で始まったが、その後ユーザー数の増加に合わせて3回線増設、そして今年度はINS1500を導入し、約500ユーザーまで対応可能な体制となった。

SIPを担う職員たち

問題は、お金のかからない方法で解決していく

SIP運営の特徴は、ハードの導入・維持管理については行政が支援し、実際のプロバイダーの運営やインターネットの普及活動は、町民を主体とするボランティアにより運営されているところである。体験講習会や無料の設定講習会の講師、また、SIP、役場、議会等のホームページの作成などはすべてスタッフの手づくりであり、技術的支援についても、高橋晃先生（釧路高専情報工学科）に顧問として協力いただくとともに、上流であるマリモインターネットの管理者にも管理用メーリングリストに参加いただき、技術的な問題をできるだけお金のかからない方法で解決している。まさに手づくりの小さなまちのプロバイダーとなっている。

ユーザー数約250名、人口の約4％の住民がインターネットを享受しており、標茶においてインターネットは特殊な人の世界のモノではなくなってきている。これからが、本当の意味での町内の情報化の始まりである。昨年はインターネットの普及とプロバイダーの事業を軌道に乗せる時期として活動し、手前味噌だがそれなりの成果があったと自負している。今年度は、SIPのもう一つの目標である地域情報化の検討を始める足がかりとして、商工会青年部との協同事業として仮想商店街を構築し、既存商店街の活性化に向けた活動を展開する予定である。

今年度は小中学校へのパソコンの導入、来年度以降には農業支援センター（仮称）の建設などの計画もあるが、標茶町のように小さな自治体に必要なことは、技術革新が超スピード進行する中、試行錯誤を繰り返しながらも、そのまちにあった情報化のスタイルを町民と一緒になって築きあげていくことだと考えている。